

(様式3)

外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣結果報告書

都道府県名	熊本県	市町村名		大学名	熊本大学大学院										
派遣日	令和6年8月23日(金曜日) 12:55~16:10 12:00~12:30 準備・打合せ 12:55~14:25 講義(「外国につながる児童生徒の教育Ⅰ」第7講) 14:25~14:40 休憩 14:40~16:10 講義(「外国につながる児童生徒の教育Ⅰ」第8講)														
実施方法	※いずれかに○をつけてください。 派遣 / 遠隔														
派遣場所	熊本大学教育学部棟3-C講義室(Zoomミーティング)														
アドバイザー氏名	東京学芸大学教育学部 齋藤 ひろみ 教授														
相談者	熊本大学大学院教育学研究科(教職大学院)履修証明プログラム (受講者)※オンライン受講を含む 熊本県・市教職員(小学校、中学校、義務教育学校) 12名 社会教育施設・教育センター職員 2名 教職大学院生(現職教員及びストレートマスター) 4名 (その他の授業担当者・コーディネーター)※オンライン受講を含む 教育学研究科教授、教育学研究科非常勤講師														
相談内容	<p>熊本においては、世界的半導体企業TSMCとその関連企業の進出・集積に伴い、外国人労働者数が急増しており、今後、公立学校への外国人児童生徒の受入も増加していくことが予想される。ところが、熊本では、外国につながる児童生徒(外国人児童生徒や外国にルーツを持つ児童生徒)の学習指導や生活指導に関する知識及び経験を持つ教員が不足している。このような状況を踏まえ、熊本大学大学院教育学研究科(教職大学院)では、文部科学省「令和4年度成長分野における即戦力人材輩出に向けたリカレント教育推進事業」の指定を受け、令和5年9月から履修証明プログラム「外国人材の受入れ・共生を支える教員等養成・研修プログラム」(計60時間)の提供を開始した。その概要は以下の表の通りである。</p> <table border="1"><tr><td>外国につながる児童生徒の教育Ⅰ 内容：子どもの実態の把握、社会的背景の理解</td><td>12時間 (90分×8回)</td></tr><tr><td>外国につながる児童生徒の教育Ⅱ 内容：日本語・教科の力の育成、異文化間能力の涵養</td><td>12時間 (90分×8回)</td></tr><tr><td>外国につながる児童生徒の教育Ⅲ 内容：学校づくり、地域づくり</td><td>12時間 (90分×8回)</td></tr><tr><td>外国につながる児童生徒の教育Ⅳ 内容：多文化共生の実現、教師としての成長</td><td>12時間 (90分×8回)</td></tr><tr><td>教育実践研究(外国につながる児童生徒の教育) 内容：日本語指導拠点校・センター校等における実習</td><td>12時間(事前・事後指導を含む)</td></tr></table> <p>初年度(令和5年度)の本プログラムでは、開講初日に実施したキックオフシンポ</p>					外国につながる児童生徒の教育Ⅰ 内容：子どもの実態の把握、社会的背景の理解	12時間 (90分×8回)	外国につながる児童生徒の教育Ⅱ 内容：日本語・教科の力の育成、異文化間能力の涵養	12時間 (90分×8回)	外国につながる児童生徒の教育Ⅲ 内容：学校づくり、地域づくり	12時間 (90分×8回)	外国につながる児童生徒の教育Ⅳ 内容：多文化共生の実現、教師としての成長	12時間 (90分×8回)	教育実践研究(外国につながる児童生徒の教育) 内容：日本語指導拠点校・センター校等における実習	12時間(事前・事後指導を含む)
外国につながる児童生徒の教育Ⅰ 内容：子どもの実態の把握、社会的背景の理解	12時間 (90分×8回)														
外国につながる児童生徒の教育Ⅱ 内容：日本語・教科の力の育成、異文化間能力の涵養	12時間 (90分×8回)														
外国につながる児童生徒の教育Ⅲ 内容：学校づくり、地域づくり	12時間 (90分×8回)														
外国につながる児童生徒の教育Ⅳ 内容：多文化共生の実現、教師としての成長	12時間 (90分×8回)														
教育実践研究(外国につながる児童生徒の教育) 内容：日本語指導拠点校・センター校等における実習	12時間(事前・事後指導を含む)														

	<p>ジウムに齋藤ひろみ教授（東京学芸大学）を招聘し、外国につながる児童生徒の教育に関する総論的な講演を行っていただいた。本プログラムは、齋藤教授らが作成された「豆の木モデル」（外国人児童生徒の教育を担う教師や支援員を養成・研修するために開発されたモデルプログラム）を参考に開発したものであるため、大変充実した形で初年度の研修を開始することができた。このことを踏まえ、令和6年度の本プログラムにおいても、最初の授業科目「外国につながる児童生徒の教育Ⅰ」の最後の部分（第7講及び第8講）において、齋藤教授に研修全体の指針となる講義を行っていただくよう依頼した。同科目の概要は以下の表の通りであり、網掛け部分が齋藤教授に依頼した部分である。</p> <table border="1" data-bbox="335 593 1412 1064"> <tr> <td>8月22日（木）</td> </tr> <tr> <td>第1講 オリエンテーション・本研修で養成を目指す資質能力</td> </tr> <tr> <td>第2講 外国の学校・日本の学校</td> </tr> <tr> <td>第3講 熊本県における外国につながる児童生徒の教育の状況</td> </tr> <tr> <td>第4講 熊本市の学校現場での取組・児童生徒の状況</td> </tr> <tr> <td>8月23日（金）</td> </tr> <tr> <td>第5講 熊本市における外国につながる児童生徒の教育の状況</td> </tr> <tr> <td>第6講 より良い学びの場を作るために</td> </tr> <tr> <td>第7講 外国につながる児童生徒の教育の課題（齋藤教授による講義）</td> </tr> <tr> <td>第8講 文化適応・言語発達の課題（同）</td> </tr> </table>	8月22日（木）	第1講 オリエンテーション・本研修で養成を目指す資質能力	第2講 外国の学校・日本の学校	第3講 熊本県における外国につながる児童生徒の教育の状況	第4講 熊本市の学校現場での取組・児童生徒の状況	8月23日（金）	第5講 熊本市における外国につながる児童生徒の教育の状況	第6講 より良い学びの場を作るために	第7講 外国につながる児童生徒の教育の課題（齋藤教授による講義）	第8講 文化適応・言語発達の課題（同）
8月22日（木）											
第1講 オリエンテーション・本研修で養成を目指す資質能力											
第2講 外国の学校・日本の学校											
第3講 熊本県における外国につながる児童生徒の教育の状況											
第4講 熊本市の学校現場での取組・児童生徒の状況											
8月23日（金）											
第5講 熊本市における外国につながる児童生徒の教育の状況											
第6講 より良い学びの場を作るために											
第7講 外国につながる児童生徒の教育の課題（齋藤教授による講義）											
第8講 文化適応・言語発達の課題（同）											
<p>派遣者からの指導助言内容</p>	<p>上記科目の第7講及び第8講では、齋藤教授より、概略以下のような内容について法的根拠や理論的背景を含めた総論的な講義を行っていただいた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「外国人児童生徒」とは？ 国内の外国人児童生徒教育の現状と課題 <ol style="list-style-type: none"> (1) 文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒等の受入れ状況等に関する調査」の結果から考える (2) 公立学校に在籍する日本語指導が必要な児童生徒 (3) 言語的文化的背景：言語別在籍数（令和3年度） (4) 特別な配慮に基づく指導を受けている児童生徒・「特別の教育課程」で指導を受けている児童生徒（令和3年度） 2. 外国人児童生徒教育の法的根拠 <ol style="list-style-type: none"> (1) 日本国憲法・教育基本法において (2) 国際法に照らして (3) 学習指導要領における位置づけ (4) 中央教育審議会答申（2021年1月）「令和の日本型学校教育の構築を目指して」 3. 外国人の子どもたちの困難 <p>日本にやってきた子どもたちは、言語も文化も異なる日本の社会・学校で、どんな問題・困難に直面しているだろうか。来日年齢・滞在期間、家庭の教育環境から、どのような困難・問題を抱えている可能性があるかを推測することができる。</p> <p><事例に学ぶ1 異文化適応></p> 										

	<p>カルロスさんのライフコースから（齋藤他『外国人児童生徒のための支援ガイドブック』凡人社より） <事例に学ぶ 2 複言語環境下の子どもたちの言語発達> グエンさんのライフコースから（同書より） <事例に学ぶ 3 文化間移動をする子どものアイデンティティ> 王さん、グエンさんのライフコースから（同書より）</p>															
<p>相談後の方針の変化、今後の取組方針等</p>	<p>齋藤教授の講義を含む「外国につながる児童生徒の教育 I」では、次の表の 4 項目について受講者の自己評価を求める事前・事後アンケートを実施した。</p>															
	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="338 557 555 629">捉える力：ア</td> <td data-bbox="561 557 1406 629">外国につながる児童生徒のシグナルを見逃さず、文化間移動と発達の視点をもってその困難さを理解することができる。</td> </tr> </table>	捉える力：ア	外国につながる児童生徒のシグナルを見逃さず、文化間移動と発達の視点をもってその困難さを理解することができる。													
	捉える力：ア	外国につながる児童生徒のシグナルを見逃さず、文化間移動と発達の視点をもってその困難さを理解することができる。														
	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="338 647 555 719">捉える力：イ</td> <td data-bbox="561 647 1406 719">外国につながる児童生徒の心理的状況を、文化適応や家庭の状況に関連付けて理解することができる。</td> </tr> </table>	捉える力：イ	外国につながる児童生徒の心理的状況を、文化適応や家庭の状況に関連付けて理解することができる。													
	捉える力：イ	外国につながる児童生徒の心理的状況を、文化適応や家庭の状況に関連付けて理解することができる。														
	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="338 725 555 797">捉える力：エ</td> <td data-bbox="561 725 1406 797">認知面の力と、教科等の学力を、年齢的な発達や学習経験を考慮して捉えることができる。</td> </tr> </table>	捉える力：エ	認知面の力と、教科等の学力を、年齢的な発達や学習経験を考慮して捉えることができる。													
	捉える力：エ	認知面の力と、教科等の学力を、年齢的な発達や学習経験を考慮して捉えることができる。														
	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="338 804 555 875">捉える力：カ</td> <td data-bbox="561 804 1406 875">文化間移動や家族の状況を、グローバル化や歴史的背景、社会制度の変化等に関連付けて理解することができる。</td> </tr> </table>	捉える力：カ	文化間移動や家族の状況を、グローバル化や歴史的背景、社会制度の変化等に関連付けて理解することができる。													
	捉える力：カ	文化間移動や家族の状況を、グローバル化や歴史的背景、社会制度の変化等に関連付けて理解することができる。														
	<p>自己評価は次の 5 段階で行ってもらった。</p>															
<table border="1"> <tr> <td data-bbox="338 960 395 996">5</td> <td data-bbox="402 960 1406 996">十分理解している（できている）が、さらに学びたい。</td> </tr> </table>	5	十分理解している（できている）が、さらに学びたい。														
5	十分理解している（できている）が、さらに学びたい。															
<table border="1"> <tr> <td data-bbox="338 1005 395 1041">4</td> <td data-bbox="402 1005 1406 1041">おおよそ理解できている（行っている）が、まだ学ぶべきことがある。</td> </tr> </table>	4	おおよそ理解できている（行っている）が、まだ学ぶべきことがある。														
4	おおよそ理解できている（行っている）が、まだ学ぶべきことがある。															
<table border="1"> <tr> <td data-bbox="338 1050 395 1086">3</td> <td data-bbox="402 1050 1406 1086">ある程度知っている（行っている）が、もっと学びたい。</td> </tr> </table>	3	ある程度知っている（行っている）が、もっと学びたい。														
3	ある程度知っている（行っている）が、もっと学びたい。															
<table border="1"> <tr> <td data-bbox="338 1095 395 1131">2</td> <td data-bbox="402 1095 1406 1131">少し分かりかけてきた（行い始めた）が、まだまだ学ぶ必要がある。</td> </tr> </table>	2	少し分かりかけてきた（行い始めた）が、まだまだ学ぶ必要がある。														
2	少し分かりかけてきた（行い始めた）が、まだまだ学ぶ必要がある。															
<table border="1"> <tr> <td data-bbox="338 1140 395 1176">1</td> <td data-bbox="402 1140 1406 1176">わからないことが多く（できていない）、これから学んでいきたい。</td> </tr> </table>	1	わからないことが多く（できていない）、これから学んでいきたい。														
1	わからないことが多く（できていない）、これから学んでいきたい。															
<p>その結果、受講前・受講後で次のグラフのような自己評価の伸びが見られた（ただし、本報告書作成時点までに回答が得られた 15 名の受講者の状況）。</p>																
<div style="text-align: center;"> <p>「外国につながる児童生徒の教育 I」</p> <table border="1"> <caption>自己評価の伸び</caption> <thead> <tr> <th>捉える力</th> <th>事前</th> <th>事後</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>捉える力：ア</td> <td>2.2</td> <td>3.5</td> </tr> <tr> <td>捉える力：イ</td> <td>2.3</td> <td>3.6</td> </tr> <tr> <td>捉える力：エ</td> <td>2.7</td> <td>3.5</td> </tr> <tr> <td>捉える力：カ</td> <td>2.3</td> <td>3.5</td> </tr> </tbody> </table> </div>		捉える力	事前	事後	捉える力：ア	2.2	3.5	捉える力：イ	2.3	3.6	捉える力：エ	2.7	3.5	捉える力：カ	2.3	3.5
捉える力	事前	事後														
捉える力：ア	2.2	3.5														
捉える力：イ	2.3	3.6														
捉える力：エ	2.7	3.5														
捉える力：カ	2.3	3.5														
<p>また、自己評価の伸びが特に大きかった受講者からは、一例として次のようなコメン</p>																

トが寄せられ、齋藤教授の講義で取り扱われた内容（生活言語と学習言語、表層文化と深層文化、カミンズの相互依存仮説など）が、受講者自身の教育現場での経験ともつながり、深く印象に残ったことを示している。

まず、今回自分自身不勉強で知らなかったことの一つが、外国につながる児童生徒たちの割合として多いのは、ポルトガル語圏の子たちが約8割にあたるということだった。その背景として、日系ブラジル移民や中国残留孤児など歴史的な背景が強いということも知ることができた。熊本での実感としては、中国籍の児童が多いようなイメージを持っていたが、全国的な傾向を知ることができてよかった。また、表層文化や深層文化などを理解することや生活言語や学習言語能力のことについて教えていただくことができて、言語の習得に関する理解がより深まった。印象に残ったことで、カミンズの相互依存仮説というのがあった。意味や概念的な深層面は小学校高学年ごろに出来上がることを知った。また、母語で深層面を刺激することで意味的・概念的な思考が高まるということが分かった。今現在、外国につながりがある児童という子供でぱっと浮かぶ児童の中にも、同じような状況の児童がおり、困難さを抱えている様子が見られる。6年生の児童で、日本語の会話は問題なくできるものの、授業中は、おそらく授業内容は理解できておらず、ぼっーっとしている様子が見られる。母語による深層面での刺激とは、具体的にどのような刺激があるのか、どのような声掛けが有効なのか、継続的な指導など簡単に構いませんので、教えていただけると大変ありがたいです。

さらに、本プログラムの運営側（本学教職大学院）としては、齋藤教授よりいただいた、「モデルプログラムの研修の枠組みを利用して、カリキュラム・シラバスを設計していることで成果が上がっていることが明確になるとありがたい」というメッセージが大変励みになり、今後、本プログラムの評価・改善を進めていく上での重要な視点となった。

1枚にまとめる必要はありませんので詳細に記載願います。

なお、本報告書の内容は、文部科学省ホームページで公開いたします。